孕巫女神社のおまんこ姉妹

※一部本編と異なる場合があります。

	トラック０１
夕恵a	「ようこそおいでくださいました。御使い様」
夜恵a	「ようこそ。御使い様」
夕恵	「私は双子巫女の姉である、夕恵と申します」
夜恵	「私は妹の夜恵」
夕恵	「本日は私達の神社、『孕巫女神社』にお越しいただき誠にありがとうございます」
夜恵	「御使い様、今日はわざわざ遠くから来てくれてありがとう。って、ん？　何？　御使い様？　どうしたの？」
夕恵	「夜恵？　もしかしたら御使い様はご自身が何故御使い様と呼ばれているのか分かっていないのかもしれないわ」
夜恵	「あ、なるほど。ん、でも御使い様は御使い様だから。それ以上でもそれ以下でもない」
夕恵	「んもう、夜恵ったら～……申し訳ありません御使い様。今から何故あなた様を御使い様とお呼びするのか、何故このような場所にお呼び立てさせていただいたのか、全てご説明させていただきますね」
夕恵	「まず何故御使い様なのかといいますと……」

夜恵
「御使い様はウチの神社で祀ってる神の神託によって選ばれた種付け役。夜恵達孕巫女神社の巫女を孕ませられる唯一の男性。夜恵達を孕ませる為に遣わされた特別なちんぽ様。だから敬意と畏怖を込めて御使い様。巫女はそう呼ぶのがしきたりなの」

夕恵
「あらあら♪　相変わらず夜恵の説明は単刀直入ね」

夜恵
「ん、長話は嫌い。必要な情報だけ伝えるのが早くて効率的」

夕恵
「んもう、そのせいでお姉ちゃんがいつも補足しないといけないハメになるのに。えぇっと、御使い様？　ご理解いただけておりますでしょうか？」

夕恵
「基本的には先ほど夜恵がご説明した通り、御使い様には私達孕巫女の事を孕ませていただきたいのです」

夕恵
「といいますのも、代々この孕巫女神社に仕える巫女は生まれつき卵子が特殊でして……神に選ばれた特別な精子でしか孕むことが出来ないのです」

夕恵
「そして今回、私達を孕ませる為に神に選ばれたおちんぽ様……それが御使い様になりまして」

夕恵「御使い様には申し訳ないのですが、本日より当神社にお泊りいただき、朝から晩まで延々と私達、孕巫女とドスケベセックスしていただき、孕ませていただきたいのです」

夜恵「赤ちゃんが出来ないと巫女の血筋が途絶えちゃうから一大事。御使い様には絶対夜恵達の事孕ませてもらう」

夕恵「あ、でもご安心ください。私達を孕ませたからといって神社に婿入りしてもらうといった事はありませんので」

夕恵「もし神託によって選ばれた御使い様に、既にお付き合いしてる人や奥さんがいらっしゃったら大変ですからね」

夜恵「ん、御使い様は夜恵達を孕ませてくれたら後は好きにしてくれていい。夜恵達の事は降ってわいた生きたオナホールだと思って？　世間体とか下手な倫理観はいらないから」

夕恵「あらあら♪　夜恵ったら、そんな、オナホールだなんて……あぁん♪　でもいいですね～♪　生きたオ・ナ・ホ・ー・ル♪　あぁ♪　何て淫靡で背徳的な響きでしょう♪」

夕恵

「今から神聖な巫女服を無理矢理脱がされ、私達の下品に育った乳房やムッチムチな太ももを握りつぶすかのように揉みしだかれ、大切な処女をまるでお弁当の包装紙を破くかのごとく雑に使い捨てられ、ひたすら犯されるのですね～♪」

夕恵b

「あぁ♪　なんという……なんという鬼畜な所業♪　はぁ、はぁ♪　あぁ～♪　早く雑に犯され孕まされたい♪　あぁ～♪　オナホールとして～♪　いえ、肉便器として……♪　ん、んほぉ……♪　おぉ……♪　そう考えただけで……ん、んふぅ♪　あぁ♪　まだ何もされてないのにマン汁が溢れますぅ……♪」

夜恵b

「お姉ちゃんの悪い癖が出てる。御使い様。お姉ちゃんは超ドMの変態で偶に暴走するけど気にしないで犯してくれていいから。むしろその方が喜ぶから手加減しないであげてね？」

夕恵

「はぁ、はぁ、はぁ……♪　あぁ♪　御使い様ぁ♪　申し訳ありません、少々下品な所をお見せしてしましたぁ……♪」

夕恵c

「ん、はぁ♪　はぁ、ん、はぁ～……♪　お、おぉ……♪　ん、んふぅ……♪　はぁ、ん、はぁ～……♪　あ、あぁ……♪」

夜恵°　「ん？　今ので少し？　お姉ちゃん……やっぱりもう手遅れなくらい変態さん」

夕恵　「はぁ、はふぅ……♪　ふふ♪　それでは説明も終わりましたし、そろそろこちらに失礼して～……」

夜恵　「ん、夜恵も～……」

夕恵　「御使い様♪　今晩は私、孕巫女である夕恵と」

夜恵　「私、孕巫女の夜恵を」

夕恵　「ただ精液を搾りだす為のオナホールだと思って」

夜恵　「ただ精液をこき捨てる為の肉便器だと思って」

夕恵　「御使い様のしたいように」

夜恵　「嬲って、犯して、弄んで……」

夕恵d　「どうか私達のおまんこを孕ませてくださいませ♪」

夜恵d　「どうか夜恵達のおまんこ、孕ませて？」

トラック０２

夕恵　「はぁ、はぁ♪　ん、あぁ♪　御使い様ぁ？　ふふ♪　こんなに体をこわばらせて♪　緊張されているのですか？」

夜恵　「ん、はぁ、はぁ……御使い様、緊張してちゃダメ。もっとリラックスして？　じゃないと勃起も上手くできない」

夕恵　「夜恵の言う通りです。緊張しすぎて本番で勃たないというのは、初めての方にはよくある失敗談ですし……って、あら？　そういえば……もしかして……」

夕恵　「御使い様？　御使い様は男女の交わり……つまるところ、セックスの経験はおありでしょうか？」

夜恵　「あ、そういえば聞いてなかった。って、御使い様？　その反応、もしかしてセックスした事ないの？」

夕恵　「まぁ♪　あらあらあら～♪　ふふふ♪　そうだったんですね♪　つまり～……御使い様はまだ～♪　メスのおまんこの味を知らない、童貞様だったのですね～♪」

夜恵　「そっか……この年まで童貞だったんだ。ん、なら仕方ない。初めてがお姉ちゃんと夜恵との3Pなんて緊張しちゃうのが当たり前。だから御使い様、気にしないで？」

夕恵　「そうですよ？　童貞卒業の初エッチが3Pなんて人は、この世にそうそういないと思いますし♪　自分を卑下したりせず、むしろ誇ってください♪」

夜恵　「安心して？　御使い様が気持ちよくセックスできるようにサポートするのも孕巫女の仕事だから……ん、ふぅぅ～～～～～～～……♪」

夕恵　「ふふ♪　私もぉ……ふぅぅ～～～～～～～～……♪　ふっ♪　ふっ♪　ふぅぅぅ～～～～～～～～～～～……♪」

夜恵　「御使い様、どう？　お耳にふぅ～されるの、気持ちいい？」

夕恵　「私達もこうやって実践するのは初めてなので拙い部分もあるかとは思いますが……って、ふふ♪　御使い様の表情が蕩けて♪　まぁ♪　気に入ってくださったんですね？　嬉しいです♪」

夜恵　「ならもっとしてあげる。すぅ～～……ふぅぅぅ～～～～～～～♪　ふぅぅぅ～～～～～、ふぅぅぅ～～～～～、ふぅぅぅぅ～～～～～～～～～～～♪」

夕恵　「私も～、ふぅぅぅ～～～～～～～～♪　ふっ♪　ふっ♪　すぅぅ～～～～～……ふぅぅぅ～～～～～～～～♪」

夕恵　「今度はタイミングをずらして～……」

夜恵　「次はタイミングを合わせて」

夕恵　「御使い様？　どうですか？　緊張は解れましたか？」

夜恵　「ん、大分いい感じだと思う。けどまだおちんぽ勃起出来てないみたい」

夕恵　「あらあら、本当ですね……ではもっとリラックスしていただけるように、今度はマッサージしながらお耳ふぅふぅしてあげますね♪」

夜恵　「ん……じゃあ夜恵も……」

夕恵　「ん、こうやってぇ♪　私達のデカ乳と柔らかい太ももで両腕を挟んで～……」

夜恵　「御使い様の腕を……ムニムニ、ムニムニ～……」

夕恵

「あぁん♪　あぁ♪　御使い様の腕が太ももの間、おまんこに擦れて……♪　ん、あぁ♪　あ、あぁ……♪　駄目ですぅ……♪　ん、んふぅ♪　これぇ……♪　枕でオナニーするのと全然違いますぅ……♪」

夜恵

「ん、ぁ……♪　ん、あぁ……♪　あぅ……♪　ん、はぁ、はぁ……♪　んん♪　御使い様ぁ……♪　はぁ、はぁ♪　夜恵の太もも……夜恵のおまんこの感触、分かる？　ぷっくり浮き出たおまんこの土手肉……おまんこ肉……♪」

夕恵

「はぁ、はぁ♪　ん、あぁ♪　そう、そこですぅ……♪　んん♪　ここが私のぉ……♪　御使い様に孕ませていただく為のおまんこですぅ……♪」

夕恵

「ん、んん♪　はぁ、はぁ♪　あぁ♪　ん、あぁん♪　申し訳ありません……♪　んん♪　御使い様の緊張を解す為のご奉仕なのにぃ……♪　いつの間にか御使い様の指でおまんこオナニーしちゃってるんですぅ♪」

夕恵

「ん、はぁ……あぁ♪　申し訳ありません、申し訳ありません、申し訳ありません、申し訳ありません～♪」

夕恵

「あぁ♪　でもぉ♪　我慢できません～♪　理性よりメスの本能が優先されてしまって～♪　あぁん♪　下品でくっさいおまんこ押し付けるの止まらないですぅ～♪」

夜恵

「御使い様、夜恵も……ん、ぁ……♪　ん、はぁ、はぁ……♪　夜恵も御使い様のお手手でオナニーさせてもらう……ん、ぁ♪　んぁ……♪　や……ん、ふぅ、ふぅ……♪　ん、んあぁ……♪」

夜恵

「ん、御使い様も……お姉ちゃんと夜恵の柔らかいメス肉で気持ちよくなって？　ん……御使い様の為に毎日揉んで柔らかくしてきた太もものお肉……楽しんで？」

夕恵

「ん、はぁ、はぁ♪　あぁん♪　やぁ♪　おっぱいが巫女服から零れてしまいました～♪　ふふ♪　あぁ♪　乳首がぷっくり膨れてしまって……やぁ♪　御使い様の腕に乳首当てるの気持ちよすぎますぅ♪」

夜恵

「はぁ、はぁ♪　御使い様……ん、夜恵の乳首も見て？　乳輪が広がった下品な乳首ぃ……ん、あぁ……♪　デカ乳輪に勃起乳首ぃ……♪　ん、んん……ふぅ、ふぅ……♪」

夕恵

「あぁ♪　私ぃ……町の人から清楚な巫女様と慕われてきたのにぃ……♪　んふぅ♪　あぁ♪　申し訳ありません～♪　そうなんですぅ♪　本当は清楚なんかじゃなくってぇ♪　こうやってオスの逞しい体にぃ♪　下品に育ったメス肉を押し付けてオナニーしちゃうような変態さんなんですぅ♪」

夕恵

「はぁ、はぁ～♪　あぁ～♪　今もぉ♪　こうやって謝りながら御使い様の指をおまんこに当てて～……♪　子宮から溢れるくっさ～いマン汁かき回してぇ♪　気持ちよくなってる厭らしい変態なんですぅ～♪」

夕恵

「あぁ♪　でもぉ♪　メスの懺悔を囁きながらおまんこ気持ちよくなるのぉ♪　背徳的すぎてぇ♪　もっと気持ちよくなってきて～♪　あぁん♪　やぁ♪　マン汁ローションでぬめぬめな太ももで～♪　御使い様を誘惑するの止まりません～♪」

夜恵

「はぁ、はぁ♪　御使い様～♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪　はぁ、はぁ……♪　ん、あぁ……♪　幻滅してない？　夜恵達、御使い様にマッサージするなんて言い訳して、本当はただただ気持ちよくオナニーしたいだけの変態だから……ん、ぁ♪　ん、はぁ、はぁ……♪　ん、あぅ……♪」

夜恵
「ん、ぁ……♪　そっか……♪　御使い様も喜んでくれてるんだ……ん、ならこのまま……もう少しするね？　ん、はぁ、はぁ……♪　おまんことおっぱいで愛してあげる」

夕恵
「ん、あぁ♪　御使い様もぉ♪　どうか遠慮なさらないでくださいぃ♪　んふぅ♪　もっとぉ♪　ご自身の性欲に従って欲情してくださいぃ♪」

夕恵
「はぁ、はぁ♪　んふぅ♪　だって～♪　私と夜恵みたいな～♪　交尾する為だけに生まれてきたようなえっろ～いメス巫女がぁ♪　汗まみれのおっぱい見せつけながら交尾フェロモンむんむんにまき散らしてオナニーしてるんですよぉ？」

夕恵
「こんな事されたら～、ど～んな強くて逞しいオスでもぉ♪　おちんぽイライラしちゃいますよね？」

夜恵
「その証拠に……ほら、おちんぽ。すっかり勃起してきてる。始めの頃とは比べ物にならないデカチンポ」

夜恵
「こんなの見せつけられたら、今すぐにでも夜恵達を孕ませたいってイラついてるのが分かっちゃう」

夕恵
「ふふ♪　更にぃ♪　こうやって耳元で～……御使い様ぁ～♪　どうかぁ～♪　下品な体押し付けながら～♪　くっさ～いフェロモンまき散らしてくるドスケベ姉妹を～♪　御使い様のデカマラで犯して孕ませて下さ～～い♪」

夜恵
「処女の癖に汗とマン汁塗れでくっさい体を押し付けながら～……御使い様の童貞ちんぽイラつかせちゃうドスケベ姉妹をワカらせて下さ～～い」

夕恵
「な～んて♪　媚びっ媚びのオネダリされたら～♪　もう我慢できませんよね～？　御使い様もぉ♪　今すぐにでも理性を捨てて生意気なメスを躾けたくなっちゃいますよね～♪」

夜恵
「だから御使い様も触って？　おまんこでもおっぱいでも、好きなところ弄っていいから」

夜恵
「今の夜恵達は御使い様の孕み袋。御使い様がヤる気になってくれるなら何でもしてあげる」

夕恵
「御使い様が望むのでしたら目の前でおしっこもしますし、豚のモノマネだってしますし、乳首やクリトリスに穴を開けたりもしちゃいます♪」

夜恵
「さすがにうんちを見せろっていうのはあれだけど……でもどうしてもって言うなら見せてあげてもいい。それくらい夜恵達は本気だから」

夜恵　「ね？　したい事全部して？　夜恵達の事、本物のオナホールだと思って弄んで？」

夕恵　「はぁ、はぁ……ん、ふぇ？　キスがしたい、ですか？　あらあらあらあら～♪　ふふ♪　御使い様ったら、想像以上に可愛らしいオネダリですね～♪」

夜恵　「でもそれが御使い様のしたい事なら、夜恵達に拒否する権利も理由もない」

夜恵　「ん、しょ……ん、んん……はぁ、はぁ……御使い様……夜恵とキスしよ？　ほら、目合わせて？　ん、はぁ、はぁ……ん～……ちゅ」

夕恵　「あらあら♪　ふふ♪　夜恵に御使い様のファーストキスを奪われてしまいました♪」

夕恵　「御使い様？　いかがですか？　夜恵の唇のお味は？」

夕恵　「薄いピンク色のリップが乗ったプリプリの唇ですよ？　美味しいですか？　それとも～……厭らしいですか～？」

夕恵　「ふふ♪　実は～♪　御使い様により興奮していただく為に～♪　今日はお口に少し工夫を施しているんです♪　何か分かりますか？」

夕恵
「それはですね～？　私達、昨日の夜から今に至るまで、一度も歯磨きをしていないんです♪」

夕恵
「昨日食事をしてから歯磨きせずに寝て起きて、また食事をして一日過ごし、その後もずぅ～っとそのまま♪　歯磨きは勿論、お水ですすいだりもしておりません♪」

夕恵
「ですから～♪　今の私達の口臭、と～～っても臭いんです♪　ほら、夜恵とキスしながらでいいですからよく嗅いでみてください♪」

夕恵
「いきますね～？　ん～……はぁぁぁぁ～～～～～～～～♪　はぁぁぁ～～～～～♪　はぁぁぁ～～～～～～♪　はぁぁぁぁぁ～～～～～～～～～～～♪」

夜恵
「ん、はぁ、はぁ……御使い様。夜恵もずっと歯磨きしてない、臭くて汚い口臭、嗅がせてあげる」

夜恵
「ん～……はぁぁぁ～～～～～～～♪　はぁぁ～～～～～……はぁぁ～～～～～～……すぅ～……はぁぁぁぁぁ～～～～～～～～～～～～♪」

夕恵　「んん～♪　スン、スンスン……すぅぅ～～～……ぅっ！　えぅ！？　おえぇぇぇぇ……！！　げほっ！　げほっ！　げほっ……！　ぅっ！　おえぇぇぇ～……！　けほっ！　けほっ……　ん、はぁ～……夜恵の口臭は臭すぎますね～♪　思わず嘔吐いてしまいました♪」

夜恵　「むぅ～……お姉ちゃんには言われたくない。それに御使い様は喜んでくれてるみたいだし、夜恵はそれでいい」

夜恵　「御使い様？　もっと夜恵のくっさい口臭嗅いで？　鼻を鳴らしながらいっぱい口臭吸いこんで？」

夜恵　「すぅぅ～～……はぁぁぁぁ～～～～～～～～……はぁぁ～～～～、はぁぁ～～～……はぁぁぁぁ～～～～～～～～～～……ん、はぁぁぁぁ～～～～～～～～～……♪　ん、あ～～……む♪　ん、ちゅ♪」

夕恵　「あらあら♪　夜恵ったら拗ねちゃって可愛いんだから♪　なら私は～、このままお耳にいっぱい口臭当てさせていただきますね？」

夜恵　「御使い様。夜恵の唾液も飲んで？　食べ残しとか垢でいっぱいのくっさ～い唾液ジュース。くちゅくちゅしてあげるから沢山飲んで？」

夜恵「んん～……くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……ん、口開けれ？　ん、ん～～……れろ～～～～～～……ん～～……あむ、ん～ちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるるるるるぅぅ～～♪　んちゅ♪」

夜恵「れろ、れろれろ……んちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるる～～～～～♪　じゅるる♪　ん～、ちゅ♪　れろ、れろれろれろれろ……じゅるる♪　じゅぷっ！　ん、ちゅ♪　れろ、れろれろ……♪　ん～、ちゅ♪　じゅるる♪　ちゅ、ちゅ♪　ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……」

夜恵「ん、れろ、ちゅ♪　御使い様、どう？　夜恵のくっさい唾液の塊、美味しい？　ん、そう……えへへ、夜恵の唾液ジュース喜んでくれて嬉しい……♪」

夕恵「ん～……夜恵ばっかりずるいですぅ……ねぇ夜恵？　私も御使い様とキスしていい？」

夜恵「ん、じゃあお姉ちゃんと交代。今度は私がお耳にいっぱい口臭はぁはぁしてあげる」

夕恵「ふふ♪　では初めに～♪　御使い様のお口に私の口臭を～……はぁぁ～～～～～～～♪　はぁぁ～～～～～～～～～～♪　はぁぁ～～～～～～～～～～～～～～♪」

夕恵　「あぁ♪　御使い様ぁ♪　私のくっさい唾液塗れのファーストキスぅ♪　どうか受け取ってください～い♪　はぁ～……んむ♪　ん、ちゅ♪」

夜恵　「夜恵も……耳元で涎をかき回して……んん、くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ」

夜恵　「ん～……はぁぁ～～～～～～～～～……はぁぁぁ～～～～、はぁぁぁ～～～～、はぁぁぁぁぁ～～～～～～～～～～……」

夕恵　「御使い様ぁ？　ん～ちゅ♪　私もぉ♪　先ほどの夜恵と同じようにぃ……ん、お口の中で涎ジュースを作って飲ませて差し上げますね？」

夕恵　「はぁ～……ん、くちゅ……くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……ん、んふぅ～……♪　いきまふよ～？　ん、あ～……んむぅ！」

夕恵　「んむぅ♪　じゅるっ！　じゅるるる！　じゅりゅりゅりゅぅ～～～♪　んちゅ♪　じゅるる♪　ん、ん～、ちゅ♪　れぷっ！　ん、じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅ♪　ん、んふぅ……♪　じゅる、じゅるじゅる……ん、ちゅ」

夕恵

「んれ～……れぷっ、じゅるる♪　じゅぷっ！
ん、んん♪　御使い様ぁ♪　ん、んん～♪
じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅりゅりゅ
りゅぅぅ～～～～……♪　じゅるる♪　ん、ん
～～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪　んはぁ、はぁ～
♪」

夕恵

「ん～♪　れろ♪　ふふ♪　御使い様の唾液がこ
んなに♪　ん、んん～……くちゅ、くちゅく
ちゅくちゅくちゅ、ん、ん～……ごく、ごく、
ごく、ごく……ん、んん～……ぷはぁ♪
はぁ、はぁ……♪」

夕恵

「はぁ～～♪　ん、ちゅ♪　ちゅ……ちゅ♪　御
使い様♪　唾液、ご馳走様でした♪　とっても
ねばっこくこってりしていて……はぁぁ～～～
～～……♪　あぁ♪　御使い様の香り混じりの
口臭～♪　ん、あぁ～ん♪　とっても臭くて、
んん～♪　ツンとした刺激臭が子宮に響きま
すぅ♪」

夕恵

「はぁぁ～～～～……♪　はぁぁ～～～～……♪
ん、はぁぁぁぁ～～～～～～～～……♪
ん、あぁ♪　御使い様ぁ♪　ん～ちゅ♪
ちゅ、ちゅ♪」

夜恵

「ん、はふぅ……お姉ちゃん、また御使い様とキ
スしてる。んん～……独り占めはダメ。ちゃん
と交代して？」

夕恵　「ん、ぷはぁ♪　はぁ、はぁ♪　あらあら♪　私ったら、興奮しすぎて我を忘れてしまいました。夜恵？　ごめんね？」

夜恵　「うん、大丈夫。お姉ちゃんが我を忘れるのは良くある事だし別に怒ってない」

夕恵　「あ、そうだ♪　ねぇ夜恵？　今度は2人で交互に御使い様とキスしましょうか♪　こうすれば3人の涎を飲ませっ子できてもっと臭い涎ジュースが出来るでしょ？　それを最後に皆で一緒にごっくんするの♪　どう？　素敵だと思わない？」

夜恵　「ん、確かに。お姉ちゃんと御使い様の3人で唾液ジュースごっくんするの、興味ある。御使い様もそれでいい？　ん、ありがと」

夜恵　「じゃあ先に夜恵からキスする。御使い様。こっち向いて？　臭い唾液を混ぜ混ぜするエッチなキス。いっぱいしよ？」

夜恵　「ん……は～むぅ……ん、ちゅ♪　れろ、れろれろれろれろ……ん、ん～……ちゅ♪　れろ、れろ……んちゅ♪　じゅる♪　ん、ちゅ♪　じゅる♪　じゅるる……じゅるるるぅ～～……♪」

夕恵

「あらあら♪　夜恵ったらそんなに激しく御使い様の唾液を吸い出しちゃって♪　あ、御使い様の唇から泡立った唾液が漏れて……舌同士が銀色の糸で繋がって♪　あぁ～♪　見ているだけでおまんこに来ますぅ♪　はぁ、ん、はぁ～……♪」

夜恵

「ん、ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……ん、御使い様からいっぱい臭い唾液貰った……ん、くちゅいくちゅ……んふふ♪　大満足。ん、次はお姉ちゃんの番だからちょっと移動する」

夕恵

「ん、はぁ～……♪　御使い様ぁ♪　お待たせしました～♪　まだ唾液は残ってますよね？　はい♪　それでは私にも沢山御使い様の唾液ジュース飲ませてください♪」

夕恵

「ん、れ～～……れぢゅ♪　じゅるる♪　じゅぷっ！　ん、ちゅ♪　れ～～♪　れろれろれろれろ♪　ん、んちゅぅ～♪　じゅる♪　じゅりゅりゅりゅ～～～♪」

夜恵

「はぁ、ん、はぁ……御使い様の唾液が口に溜まって……ん、えぅ……少し喋り辛い。ん、えぷっ……ん、れも、お姉ちゃんと御使い様と一緒にごっくんしなきゃだから……ん、もう少し我慢する」

夕恵「んん～……じゅる♪　じゅるるるぅ～……ん、んん～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……♪　ん、くちゅ……くちゅくちゅくちゅくちゅ……んふふ～♪　んれ～～ちゅ♪　はふぅ～♪　私もいっふぁい御使い様の唾液ジュースをいたらきまひた～♪」

夕恵「それでは～♪　わたひも御使い様の耳元に移動ひて～……」

夕恵「やへ？　準備はひ～い？」

夜恵「ん、お姉ひゃん、らいろうぶ。いつれもごっくんれ来る」

夕恵「ふふ♪　れは御使いひゃまもいっひょに♪　いきまふよ～♪」

夕恵e「くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪」

夜恵e「くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……」

夕恵f「ん……ごく、ごく、ごく、ごく……ぷはぁ！はぁ、はぁ……♪」

夜恵「ん……ごく、ごく、ごく、ごく……ぷはぁ！
はぁ、はぁ……♪」

夕恵「あぁ～♪　これぇ～♪　私と夜恵と御使い様の
唾液ミックスジュースぅ♪　あぁ♪　こんなに
臭くて美味しいジュースは初めてですぅ♪」

夜恵「ん、あ～んむ♪　んちゅ、くちゅくちゅくちゅ
くちゅ……ん、まら唾液、舌の裏に残ってる…
…ん……ごく、ごく、ごく……ぷはぁ♪
はぁ、ん、あむ、ん、んん……♪」

夜恵「ぷはぁぁぁ～～～～～～～♪　はぁぁ～～～
……ん、御使い様。ん～ちゅ♪　ご馳走様」

夜恵「ん、はぁぁぁ～～～～～～～、はぁぁ～～～
～、はぁぁぁぁ～～～～～～～～……すぅぅ～
～……はぁぁぁぁ～～～～～～～～……」

夜恵「んふぅ～♪　スン、スンスン……ぅっ！　うぅ
……！　おえぇぇぇぇぇぇ……！　けほっ！
けほっ！　あうぅ、臭いぃ……こんなに臭い
息は初めて……」

夕恵「あぁん♪　でもぉ♪　このむせ返るほど臭い息
が堪らなくメスの本能を刺激してくるんですぅ
♪」

夕恵「こうやってぇ♪　御使い様のお耳を受け皿にしてぇ♪　すぅ～……はぁぁ～～～～～♪　はぁぁ～～～～♪　はぁぁぁぁぁ～～～～～～～……♪」

夜恵「はぁぁぁ～～～～～～～」

夕恵「はぁぁぁ～～～～～～～♪」

夜恵「はぁぁ～～～～～～～」

夕恵「はぁぁぁ～～～～～～♪」

夕恵ஐ「すぅぅ～～～……はぁぁぁぁぁ～～～～～～～～～～～～～～……♪」

夜恵ஐ「すぅぅ～～～……はぁぁぁぁぁ～～～～～～～～～～～～～～……♪」

夜恵「ん、けほっ！　けほっ！　ぅぅ……臭いぃ……あぁ……御使い様のお耳くっさ～～～～……はぁ～……夜恵の息もくっさ～～～……ぅぅ……おえぇぇぇ～～～……くっさ～～い……臭い臭いぃ……はぁ～……くっさ～～……」

夕恵「あぁ♪　臭いですぅ♪　御使い様のお耳ぃ♪　んん♪　はぁ～～～♪　あぁ♪　これが口臭の臭さ～♪　んん♪　やぁん♪　メスの本能揺さぶられますぅ♪」

夕恵

「匂いだけでおまんこ犯されてるみたいで～♪
はぁ、はぁ～♪　あぁ～♪　御使い様のくっさ～いお耳の香りで～♪　乳首勃起しまくり♪
私の全身が～♪　早くおちんぽ様来てくださ～いってオネダリしちゃってますぅ♪」

夕恵

「それにぃ……あぁ♪　これ～♪　よく見たらお耳の中にくっさい耳カスが沢山ありますね～♪
はぁ～……♪　あぁん♪　この耳カスの香りぃ♪　すんすん……はふぅ～♪　これも堪らなく臭くて美味しそうですね～♪」

夜恵

「ん、ほんとだ。黄色くて臭い耳垢が溜まってる。それに夜恵達の吐息で湿って張り付いて……ふぅぅ～～～～～～～……ん、息吹きかけるだけじゃ全然取れない」

夕恵

「そうですね……御使い様のお耳を臭くしてしまったのは私達ですし、ここは孕ませていただく前にこのままお耳を綺麗にしてさしあげましょう♪」

夜恵

「ん、いいアイデア。丁度耳元にいるし、お姉ちゃんと夜恵の2人で両耳をしゃぶって綺麗にしてあげる」

夕恵

「はい、そうしましょう♪　御使い様？　どうか、このまま私達姉妹を両耳に侍らせながら、変態巫女姉妹の耳舐めじゅるじゅるご奉仕♪堪能してくださいね♪」

トラック０３

夕恵「御使い様ぁ～♪　ん～ちゅ♪」

夜恵「御使い様。ん……ちゅ」

夕恵「ふふ♪　これからた～っぷりと、御使い様の汚れたくっさ～いお耳に～♪　私の舌をねじ込んで～♪　臭く黄ばんだ～♪　み～み～か～す♪　しゃぶり取って差し上げますね♪」

夜恵「御使い様はただ寝ててくれればいいから。全部夜恵達に任せて？　それか……ほら、ここ。おまんこに指入れててもいいよ？　夜恵達のパイパンおまんこで壺洗いしてあげる」

夕恵「あいにくと私達は生まれつきマン毛が生えない体質ですのでたわし洗いは出来ないのですが、その分パイパンつるつるおまんこでご奉仕できると思いますので。どうぞ、耳舐めされてる間はこちら、姉妹のダブルパイパン壺洗いをお楽しみください♪」

夕恵「それでは……夜恵？　いきますよ？」

夜恵「ん。御使い様。お耳、しゃぶってあげるね？」

夕恵：「はぁぁぁ～～～～～……ん、れ～～～～……んちゅ♪　じゅる……じゅるるる～～……♪　ん、じゅるる♪　じゅぷっ♪　ん、れ～～～～……ろれろれろ……♪」

夜恵：「はぁぁぁ～～～～～……ん、れ～～～～……んちゅ♪　じゅる……じゅるるる～～……♪　ん、じゅるる♪　じゅぷっ♪　ん、れ～～～～……ろれろれろ……」

夕恵：「ん、ちゅ♪　ふふ♪　御使い様～？　いかがですか？　姉妹に両耳を犯される気分は？」

夕恵：「先ほどまで舌を絡ませながらじゅるじゅる唾液を交換してたメスのし～た♪　どうぞ、お耳でもいっぱい感じてくださいませ♪　は～～……む♪　じゅる♪　じゅりゅじゅりゅじゅりゅじゅりゅ～♪」

夜恵：「ん、れろれろ。ん、ちゅ。御使い様……はぷっ♪　ん、れろれろれろれろ……ん、耳の中ゴミだらけ。普段絶対お掃除してない……とっても臭くて汚い……ん、れ～～ろれろれろ、じゅる、じゅりゅりゅりゅ～～……ん、ちゅ」

夜恵：「ほら、よく聞いてみて？　夜恵が御使い様の耳カスをくちゅくちゅする音」

夜恵　「ん、はぁ～～……んむ♪　ん、くちゅ、くちゅくちゅくちゅくちゅ……んむ、くちゅ、くちゅくちゅ……れぷっ、んん♪　ごく、ごく、ごく……ぷはぁ……！　はぁ、はぁ……」

夜恵　「ぅ……おえぇぇぇ……耳カス、臭すぎぃ……ん、はぁぁぁぁ～～～～～～～……夜恵の口臭、よりいっそう臭くなっちゃった」

夜恵　「ん、はぁぁ～～～～～～……でもぉ……ちゅ。ん～……ちゅ。あむ、ん、れろ、れろれろれろれろ……ん、唾液と耳カスが溶けて混ざった味。臭すぎて逆に癖になる。ん、まさに御使い様でしか味わえない珍味」

夜恵　「これ、もっと食べたい……もっと。もっともっと。ね、御使い様？　夜恵にいっぱい食べさせて？　御使い様の特製耳カススープ。メスを虜にしちゃうドスケベスープ。ごっくんさせて？」

夕恵　「はぁ、はぁ♪　ふふ♪　あらぁ♪　私の舌にも耳カスが散らばって♪　れろれろれろれろ♪　あぁ♪　御使い様の耳カスぅ♪　んふぅ♪　あむ♪　ん、くちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ちゅぷ♪」

夕恵

「ん～♪　ふふ♪　このまま～……ごく、ごく、ごく、ごく……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ～～～～……♪　あぁ♪　くっさ～～～～い♪　はぁぁぁ～～～～～～～～♪　ふふ♪　あぁ～～♪　と～っても臭いですぅ～～～～♪」

夕恵

「御使い様の長年放置された耳カスぅ♪　んん♪　まるでおしっこのように黄ばんでて♪　ふふ♪　はぁぁぁ～～～～～～～♪　あぁん♪　私の息がむせ返りそうなほど臭くなってしまいました～♪」

夕恵

「こんな臭い息ではもう一生お外を歩けませんよ～……ふふ♪　御使い様ぁ？　どうしてくださるんですか～？　私も夜恵もぉ♪　このままでは口臭が臭すぎて嫁の貰い手がいなくなってしまいますぅ～♪」

夕恵

「ん、はぁぁ～～～～……♪　あぁ、くっさ～～……♪　んふぅ～♪　はぁぁ～～～～……くっさいですぅ～……♪　んん♪　あぁ♪　臭いぃ♪　はぁ～～～……くっさ～～～～～い……♪」

夕恵

「ふふ♪　御使い様たらぁ♪　臭いって言われて喜んでらっしゃるんですか？　あらあら～♪　んもう、私が言えた話ではありませんが、御使い様も相当な変態さんですね♪」

夕恵　「でしたら～……もっと臭い息を嗅がせてあげますので～……もう少しお耳の中、失礼致します♪　ん、れ～～～……ん、ちゅ♪　んちゅ……じゅる、じゅるじゅる……はぷ……」

夜恵　「ん、もっろぉ……れろれろれろれろ……舌が痺れるくらいいっぱい耳カス舐めとってあげりゅ……ん、ちゅ♪　じゅる♪　じゅりゅりゅりゅりゅりゅ～～～……ん、ちゅ。れろ、れろれろ……」

夕恵　「あぁ♪　また大きいのが取れて♪　ふふ♪　あ～……む♪　んん♪　くちゅ、くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ん、ごく、ごく……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ♪」

夕恵　「んふ♪　ごっくんしたばかりの口臭を～……はぁぁぁ～～～～～～♪　はぁぁぁ～～～～♪　はぁぁぁ～～～～♪　すぅ～～～……はぁぁぁ～～～～～～～♪」

夕恵　「あぁ♪　お耳が口臭で湿って、ん、はぁ～～～～……♪　あぁん♪　こんなのダメですぅ♪　ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪　あぁ♪　吐きそうな程臭くって～♪　はぁぁ～～～……んむ♪　ちゅ♪」

夕恵　「はぁ、はぁ……♪　ん、あぁん♪　やぁ♪　御使い様ぁ♪　ん、ちゅ♪　ん、やぁん♪　そんなぁ♪　あぁん♪　んもぅ……♪　ダメですぅ♪　いきなりお尻揉んでくるなんてぇ……♪　ん、はぁ、あぁん♪」

夕恵　「ふふ♪　耳舐めとおまんこ壺洗いだけじゃ満足できないんですか？　ん、あぁん♪　ふふ♪　で～も～♪　私のお尻に興味を持っていただけて、ん、はぁ、はぁ♪　あぁ♪　とっても嬉しいですぅ♪」

夕恵　「代々孕巫女神社で生まれたメスはぁ♪　オスを喜ばせるよう贅肉が余分に乗るように成長するみたいで～♪　ん、あぁん♪　はぁ、はぁ♪　幼い頃からおっぱいもお尻も太ももぉ♪　異常に発達しちゃうんですぅ～♪」

夕恵　「ん、あぁ……♪　はぁ、はぁ……♪　ん～ちゅ♪　れろ、れろれろれろれろ♪　んふふ♪　ですからぁ♪　御使い様以外の男性の性欲もぉ♪　無意識に煽っちゃってぇ♪　ん、あぁん♪　余計なトラブルも多かったんですよぉ～？」

夜恵　「ん、本当にそう。この下品な体は……ちゅ。いつか現れる御使い様だけの物なのに……れろ、れろれろ……ん～ちゅ。ちゅ、ちゅ。知らない男に毎日視姦されて本当に気持ち悪かった」

夜恵
「だから、ん～……ちゅ。小さい頃から夢見てきた御使い様にやっと出会えて、今日から御使い様だけのメスにしてもらえるって思うと……ん、れろ、れろれろ……ん～……ちゅ。ちゅ、ちゅ。それだけでもう夜恵は幸せで一杯」

夕恵
「夜恵の言う通りです♪　御使い様ぁ♪　私ぃ♪　もう御使い様以外の男性に体を見られたくありませんので～♪　どうかもっとぉ♪　おっぱいやお尻に痣が付いちゃうくらい激しく揉みしだいてくださいぃ♪」

夕恵
「はぁ、はぁ♪　私達孕巫女は御使い様だけの物なんだ～って♪　他の誰にも渡さないんだ～って♪　どうかメスの体に刻み付けてください♪　マーキングしてくださいぃ♪」

夕恵
「ん～……れろ、れろれろれろ……ん、んんっ！　ぷはぁ！　やっ、ひゃうっ！　やっ！　ん、み、御使い様ぁ……！　ん、あぁ♪　やっ♪　そこ、そこは、ん、あぅ……♪　はぁ、はぁ♪　あぁん♪」

夕恵
「やぁ、ダメですぅ♪　ん、んふぅ～♪　あぁ♪　そこは不浄の穴ぁ……♪　ケツ穴ですぅ～♪　ん、はうぅ……♪　やぁ♪　そんな汚い穴に指を入れては……ん、あ、あぁん♪」

夕恵
「はぁ、ん、ダメぇ～……♪　そこ弄られると～……んふぅ～♪　ん、んおぉ……♪　げ、下品な声が漏れましゅぅ……♪」

夕恵
「んふぅ～！　ぶほっ！　お、おぉぉ……♪　ん、おほぉぉ……♪　お、お、おぉぉ……♪　おっほ……♪　あぁ♪　御使い様ぁ♪　んひぃ……♪　あぁ♪　でりゅぅ……♪　気持ちよしゅぎてぇ♪　お、おぉぉ……♪　メス声出ましゅぅ～♪　ん、んふぅ♪」

夕恵
「ぶひっ♪　ん、んほぉぉ～～……♪　おぉ～……♪　ケツ穴ぁ♪　あぁ♪　そんなぁ♪　うんちの穴ほじくられては～……お、お、お、おぉぉ……♪　捲れりゅぅ～♪　うんち穴捲れてうんちできなくなりまひゅぅ～……♪」

夜恵
「ん、んぁ、やっ！　ダメ……御使い様、お尻は、ん、やっ、だ、ダメ……そこ弱いから……ん、あ、あうぅ……！　ん、んんっ！　あっ、やぁ……！」

夜恵
「んん♪　ほんとダメぇ……む、無理だからぁ……！　ん、やっ！　んあぁ……う、うぅ……！　はぁ、ん、ぉ……ぉ、んふぅ……！　やっ、指、爪立てちゃ……ん、ひぅぅっ！？　い、イぎゅっ……！」

夜恵
「んふぅ～……！　ふぅ～！　ふぅ～～～……！
や、夜恵も捲れるぅ……！　ん、んおぉぉ……！　ケツぅ……！　んおぉぉ……！　ケツ穴ぁ……！　はぁ、ん、ひぅっ！　んぉ……！
お、おぉぉ……！　ケツ穴捲れりゅぅ……！
んおぉ……！　お、おぉぉ……！」

夕恵
「ん、んぶぅ～……♪　おぉぉ……♪　御使い様ぁ♪　ん、んほぉ～……♪　お、おぉぉ……♪　あぁ♪　申し訳ぇ……んほぉぉ～……♪
ん、おぉぉ……♪　ありません～……♪　ん、んふぅ～……♪」

夕恵
「ケツ穴ほじくられてぇ♪　んごぉぉ♪　耳舐めご奉じ～……♪　耳カスお掃除がぁ……♪
お、お、おぉ～♪　疎かにぃ♪　ん、んふぅ♪
なってしまいまいた～……♪　おぉぉ……♪」

夜恵
「ん、はぁ、はぁ……ん、んふぅ……！　おぉぉ……！　御使い様が、んん♪　ケツ穴気に入ってくれて良かった、はぁ、けどぉ……んぉ！
おっ！　んおぉ……♪　おぉぉ……♪」

夜恵
「お、お、お、お、お、お、お、おぉ……♪　うぶっ……！　お、おぉ……気持ちよしゅぎてぇ……ん、おぉぉ……メス声漏れりゅぅ……うぐぅ……お、おぉ～……ケツ穴ぎもじいぃ……♪　ん、んぶぅ……♪」

夕恵

「んふぅ♪　おぉ……♪　ん、おぉぉ……♪
お、お、お、おぉ……♪　はぁ、ん、うぶぅ……♪　あぁ♪　ケツぅ……♪　ん、んん♪
あぁ♪　ケツ穴広げられてぇ♪　んん♪　あぁ♪　ぶぴゅぶぴゅオナラ漏れまじゅぅ～～……♪　くっさいケツ穴臭漏らしまじゅぅ～～……♪」

夕恵

「はぁ、ん、はぁ～……♪　んぉ♪　お、おぉぉ……♪　あぁ♪　おぉぉ♪　あぁ♪　出ちゃいましたぁ♪　んん♪　神に仕える巫女のぉ♪
下品でくっさいオナラ～♪」

夕恵

「はぁ、はぁ～♪　あぁ～♪　何て下品なんでしょう♪　んぶぅ～♪　おぉぉ～……♪
おぉぉ～～……♪　ケツの皺を一枚一枚丁寧に剥かれでぇ～……♪　んふぅ～……♪　オナラと一緒にケツ汁かき出されるの分かりますぅぅ～……♪」

夜恵

「ん、はぁ、はぁ……御使い様……ん、はぁ……ん、ちゅ。はぁ……ん、夜恵の汚い穴……ケツ穴……ん、お、おぉぉ……♪　あぁ……ん、もっとぉ……もっとほじほじして欲しい……♪」

夜恵
「ん、おぉぉ……♪　これぇ……ん、想像以上に、んふっ！　ふっ、ふっ……ん、はぁ、はぁ～……んほ……ぉ、んぉ……き、気持ちいいからぁ……ん、も、っとぉ……おっ♪　おっ♪　おぉぉ……♪」

夜恵
「ん、はぁ、はぁ……ぅ、あうぅ……ん、んん♪　御使い様ぁ……♪　ん、はぁ、んむぅっ！　おぉぉ……♪　んふぅ♪　お、お、お、おぉぉ……♪　あぁ……♪　ん、出るぅ……ぅぅ……夜恵もぉ……おぉぉ……♪　ケツ穴からガスがぁ……ん、おぉ……♪　オナラが出るぅ……！　出ちゃうぅ……！」

夜恵
「ん、んふぅ……！　おぉ……！　お、お、お、お、お、お、お、おぉぉ……！　ん、んん……！！」

夜恵
「ぷはぁ！　はぁ、ん、あぁ……で、出るぅ……！　お、おぉ……！　オナラの音ぉ……！　ん、おぉぉ……♪　お、おぉぉ……♪　くっさいオナラぁ……♪　あぁ♪　でりゅぅ……♪　ん、んふぅ……♪　おぉぉ……♪　お、おぉぉ……♪」

夕恵
「ん、ぷはぁ♪　はぁ、はぁ♪　ん、はぁぁ～～～～……♪　あぁ♪　んん♪　ケツ穴からいっぱいオナラ出ましたぁ♪　ん、はぁ、はぁ……♪」

夜恵　「はぁ、はぁ……ん、ケツ穴ほじくられてオナラ出すなんて初めて。御使い様とエッチすると、今までオナニーで味わった事ない快楽を味わえて楽しい」

夕恵　「あぁ♪　本当にその通りです♪　オナニーでは味わえなかった新たな快楽を教えてくださり誠にありがとうございますぅ♪」

夕恵　「お礼と言っては何ですが、こちら。私達のマン汁とケツ汁で汚れた指を、しゃぶって綺麗にしてさしあげますね♪」

夜恵　「ん、夜恵もこっち、右手のケツ汁舐めて綺麗にしてあげる」

夕恵　「で～は～……あ～～む♪　ん～、ちゅ♪　じゅる♪　じゅるるる♪　ん、んん～♪　じゅる♪　じゅぷぷっ♪　ん、ちゅ♪　れ～ろれろれろ♪　ん、ちゅ♪　じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅ～～♪」

夜恵　「夜恵も～……ん、あ～……んむぅ、じゅぷっ！　ん、れりゅ、じゅるるるぅ～～……！　ん、れりゅ、じゅるる、ん～……じゅりゅ、じゅりゅりゅりゅ～～！」

夕恵　「ん、あぁ～♪　これがケツ穴の味ぃ～♪　ん、じゅるるるるぅ～～♪　ん、ぷはぁ♪　はぁ～♪　あぁ♪　幸いうんちはついてないようですけど……ん、ちゅ♪　ふふ♪　あぁ♪　何て苦くて臭いんでしょう♪」

夕恵　「あぁ♪　私のケツ汁ぅ♪　ん～ちゅ♪　れろ、れろれろ……♪　はぁ～♪　あぁ♪　くっさ～～い♪　はぁ～～～……♪」

夕恵　「あぁ♪　臭すぎて臭すぎて～……すんすん、すぅぅ～～～～……ん、お、おぼえええぇぇぇぇえええぇ……！！　おえぇぇぇ……！！　うぶっ！　ぅっ！　おごえぇぇぇぇぇぇぇっ……！？」

夕恵　「うぷっ、えぅ！　けほっ！　けほ、けほっ……！　ぅぶっ！　ぅぅ……はぁ、はぁ～……♪　あぁ……♪　申し訳ありません♪　あまりに自分のケツの匂いが臭すぎて、嘔吐いてしまいました♪」

夕恵　「残ったケツ汁もしゃぶらせていただきますね♪」

夜恵　「ん……夜恵のケツ汁も……ん、じゅる、じゅるじゅる……れ～ろれろれろれろれろ……ん、ちゅぷ、じゅるじゅる……んん、んむ、ぷはぁ！　はぁ～……」

夜恵　「ん、すぅぅぅ～～～～～～～……んぶっ！？
ぅっ！　えぅ！　んぶぅ！？　お、おえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……！！　うぶっ！　げほげほっ！　ぅ、うぇっ！　おぼえぇぇぇぇぇぇぇぇ……！！」

夜恵　「うぶっ、ぅ……ぐさいぃ……夜恵のケツ汁……ぅ……おえぇぇ……ん、はぁ、はぁ……ぐざすぎるぅ～……ぅえ、おぇ……ん、はぁ、はぁ……」

夕恵　「ふふ♪　夜恵もケツ汁の味は初めてだもの。下品に嘔吐いちゃうのは仕方ないわ」

夜恵　「はぁ、はぁ～……ん、確かに自分でケツ穴ほじった事ないから、新鮮な臭さだった」

夕恵　「じゃあこの機会にしっかり私達姉妹のケツ汁の香りを覚えましょうか♪」

夜恵　「ん、分かった。ならせ～ので一緒に吸お？」

夕恵　「ん♪　それじゃあ～……」

夕恵♡

「せ～の♪　すぅぅぅ～～～～～～～～……
はぁぁぁぁ～～～～～～～～……♪　うぶっ！　お
ぼえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……！！　ぅっ！　お
えぇぇぇぇ……！　けほっ、ぅ……おぼ
えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……！！　ぶぇっ！　げ
ほっ！　げほげほっ……うぶっ……はぁ、
はぁ、はぁ、はぁぁ～……」

夜恵♡

「せ～の！　すぅぅぅ～～～～～～～～……
はぁぁぁぁ～～～～～～～～……♪　うぶっ！　お
ぼえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……！！　ぅっ！　お
えぇぇぇぇ……！　けほっ、ぅ……おぼ
えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……！！　ぶぇっ！　げ
ほっ！　げほげほっ……うぶっ……はぁ、
はぁ、はぁ、はぁぁ～……」

夜恵

「はふぅ～～……ん、んむぅ……御使い様ぁ……
ん、ちゅ……好きぃ……ちゅ、ちゅ……汚いケ
ツ穴も遠慮なく愛してくれる御使い様、大好き
……♪」

夕恵

「あらあら♪　夜恵ったら大胆ですね～♪　んふ
♪　な～ら～♪　私も失礼して～……♪　あ～
……む♪　ん～～、ちゅ♪　ふふ♪　私も大好
きですよ～？　御使い様～♪　ん～……ちゅ
♪」

夕恵

「はぁ♪　御使い様ぁ♪　好きです♪　大好きで
す～♪」

夜恵　「好き……御使い様、大好き……♪　好き。好き。すき。スキ♪」

夕恵　「あぁ♪　好きです♪　大好きです♪」

夜恵　「好き。大好き」

夕恵　「御使い様ぁ～♪」

夜恵　「御使い様♪」

夕恵　「す～き♪」

夜恵　「好き」

夕恵　「好きです♪」

夜恵　「大好き」

夕恵　「しゅ～き～♪」

夜恵　「スキスキスキスキ、大好き」

夕恵　「愛しております♪」

夜恵　「愛してる」

夕恵　「臭くてねっとりした唾液も♪」

夜恵　「臭くて黄ばんだ耳カスも」

夕恵「全部全部大好きです♪」

夜恵「御使い様の全てが好き」

夕恵「御使い様ぁ～♪」

夜恵「御使い様……♪」

夕恵「れ～～～～……♪　じゅるじゅるじゅるじゅるじゅるじゅるじゅるじゅるじゅるじゅるじゅるぅぅ～～～～～♪　ん、ぷはぁ♪はぁ、はぁ、はぁ、はぁ～～……♪」

夜恵「れ～～～～……♪　じゅるじゅるじゅるじゅるじゅるじゅるじゅるじゅるじゅるじゅるじゅるぅぅ～～～～～♪　ん、ぷはぁ♪はぁ、はぁ、はぁ、はぁ～～……♪」

夕恵「ん～……くちゅ、くちゅくちゅ♪　ふふ♪　お口の中が御使い様の耳カスだらけで……あむ、あむあむ……」

夜恵「ん、口の中が御使い様の臭さで満たされてる……んん、くちゅくちゅ、くちゅくちゅくちゅくちゅ……えぅ……早く飲みこまないと上手く喋れない」

夕恵「そうれすね～……なら夜恵？　一緒に御使い様の耳元でごっくんしてあげましょうか♪」

夜恵　「ん、そうすりゅ……御使い様？　夜恵達孕巫女姉妹の耳カスごっくん、楽しんで？」

夕恵　「で～は～♪　いきまふよ～？」

夕恵＜　「くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……ん♪　ごく、ごく、ごく、ごく……んん、ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……はぁぁぁぁ～～～～～～～～～～……♪」

夜恵＜　「くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……ん♪　ごく、ごく、ごく、ごく……んん、ぷはぁ！　はぁ、はぁ……はぁぁぁぁ～～～～～～～～～～……」

夕恵　「ふふ♪　御使い様ぁ～♪　お疲れ様でした～♪　私達の耳舐めご奉仕、気に入ってくださいましたか？」

夜恵　「途中ケツ穴弄られて耳舐めが疎かになっちゃったけど……ん、そっか。喜んでくれて嬉しい。御使い様……大好き。ん、ちゅ」

夕恵　「もしよろしければ、これからも私達が孕むまで、望むなら孕んだ後でも♪　いつでもお耳ご奉仕してさしあげますので遠慮なくおっしゃってくださいね♪」

夜恵　「もう夜恵達のお口もおまんこもケツ穴も。全部御使い様専用だから。好きに弄んで楽しんで欲しい」

夕恵　「ふふ♪　夜恵の言う通りです♪　何たって、私達は御使い様専用のオナホール♪　専用孕み袋♪　専用肉便器なんですから♪」

夕恵　「なので、ふふ♪　この後の本番孕ませセックスも一切遠慮する必要はございません♪」

夜恵　「ん。御使い様のおちんぽで本番孕ませセックス。オナニーと比べてどれだけ気持ちいいか、とっても楽しみ」

夕恵　「どうか私、夕恵の新品未使用の孕巫女おまんこを♪」

夜恵　「夜恵のビラビラ発情孕巫女おまんこを」

夕恵一　「お楽しみください♪」

夜恵一　「楽しんで？」

トラック０４

夕恵　「では御使い様♪　まずは私、夕恵のおまんこでご奉仕させていただきますね♪」

夜恵　「ん、夜恵はお姉ちゃんのセックスが終わるまでこのまま耳元でご奉仕。御使い様の唾液も、耳カスも、夜恵のケツ汁も。全部しゃぶり尽くしたくっさい口まんこで、お耳ペロペロしてあげる」

夕恵　「ふふ♪　私も～……御使い様の正面に移動しまして～……」

夕恵　「ん、はぁ～……♪　あぁ♪　御使い様ぁ♪　ん～……ちゅ♪　ふふ♪　おちんぽ♪　ズボンから出しちゃいますね♪」

夕恵　「ん、はぁ～～～♪　あぁ♪　出てきましたぁ♪　あぁ♪　これが本物の……御使い様のおちんぽなのですね～♪」

夕恵　「あぁ♪　なんてご立派なのでしょう～♪　ん、はぁ、はぁ～……♪　あぁ♪　それに先っぽ♪　亀頭がチン皮に隠れちゃって♪　ふふ♪　こんなに逞しいのに先っぽは恥ずかしがり屋さんだなんて、可愛らしいおちんぽ様です♪」

夜恵　「ん、はぁ、はぁ……夜恵のとこまでちんぽの匂い香ってくる。ん、すん、スンスン。はふぅ～……イカ臭いチンポ臭……ケツ穴の匂い以上に独特で臭いちんぽ臭ぅ……♪」

夕恵　「おそらく夜恵の言う臭い香りっていうのは、チン皮の中に溜まったチンカス臭なんでしょうね～♪　ふふ♪　あぁ～♪　きっとそうですぅ♪　そうに違いありません～♪」

夕恵　「あぁ♪　御使い様ぁ♪　どうか私にぃ♪　このくっさいチン皮をおまんこで捲らせて下さ～い♪」

夕恵　「セックスするのと同時にぃ♪　んん♪　チン皮の先っぽを～♪　まんこのビラビラでムキムキ～って捲ってぇ♪　御使い様の童貞とチンカスを同時に頂かせてくださいぃ～♪」

夕恵　「あん♪　ふふ♪　今私のおまんこと御使い様のおちんぽ様がキスしましたぁ♪　はぁ、はぁ♪　あぁ♪　分かりますか～？　私の、孕巫女のおまんこ肉ぅ♪」

夕恵　「肉厚でぷるっぷるのパイパンおまんこぉ～♪　人生で一度っきりのぉ♪　御使い様だけが味わえる孕巫女の処女おまんこですぅ♪」

夕恵　「ん、はぁ、はぁ～……♪　あぁ～♪　御使い様ぁ♪　入れますね～♪　御使い様の包茎チンカスおちんぽぉ♪　いただきますね～♪」

夕恵　「ん、あ♪　あぁ♪　凄いですぅ♪　んっ！　中に入ってきて……ん、あぁ♪　はぁ、はぁ♪　あぁ♪　御使い様のチン皮もぉ♪　んん♪　少しずつ剥けてきてぇ♪　ん、あ、あぁん♪」

夕恵　「はぁ、はぁ♪　んん♪　あと少しぃ♪　ん、あ♪　そうです♪　そこぉ♪　プニプニしたおまんこの膜ぅ♪　それが私の処女膜ですぅ♪」

夕恵　「はい♪　いいですよ？　一気に貫いてください♪　私を御使い様だけの孕ませオナホールにしてください♪」

夕恵　「んふっ！　あ、あ、あ……んぶぅっ！？　お、おぉぉおおおぉぉ……♪♪」

夕恵　「おぉぉぉ……♪　ん、んぶぉおおぉぉ……♪　お、お、おぉぉ……♪　あ、あぁ♪　き、来ましたぁ♪　んぶぅ……♪　おほぉぉ……♪　お……お……おぉぉ……♪」

夕恵　「あぁ♪　おちんぽぉ♪　ん、んふぅ～……♪　はぁ、はぁ～……♪　あぁ♪　おちんぽ様ぁ～……♪　んぶぅ～……♪　はぁ、はぁ、はぁ、はぁ～……♪」

夕恵　「あぁ♪　なんて甘美な……♪　ん、んふぅ～……♪　処女喪失があまりに気持ちよすぎて～……♪　ん、おぶぅ～……♪　おぉぉ♪　下品な声が止まりません～♪」

夕恵┐　「ぶぅ～……♪　ぶひっ♪　ぶひぶひぃ～～……♪　おぉぉ……♪　ん、おぉぉ……♪　ん、お、お、おぉぉ……♪　ん、んふぅ～……♪　おぉぉ……♪　んぇ……♪　あぁ……♪　ん、あうぅ……♪　おぉぉ……♪　お、おぉ……♪　んふぅ～……♪」

夜恵┐　「お姉ちゃんがこんな豚みたいな声上げてるの初めて聞いた。ん、そんなに御使い様のちんぽ凄いんだ。ん、はぁ、はぁ……いいなぁ～……早く夜恵も御使い様のおちんぽ欲しい……ん、んん……お姉ちゃんズルイ……」

夕恵　「ふふ♪　あらあらぁ♪　んふぅ～……♪　夜恵が嫉妬なんてぇ♪　ん、あぁん♪　珍しいわね～♪　はぁ、ん、はぁ～……♪　ん、大丈夫♪　後でちゃんと交代してあげるから、ん、おご♪　お、おぉぉ……♪　はふぅ♪　今はぁ♪　我慢してて？」

夜恵　「ん、分かってる。夜恵は夜恵で御使い様のお耳しゃぶってるから。お姉ちゃんは御使い様のちんぽ、気持ちよくしてあげて？」

夕恵　「ん♪　ふふ♪　御使い様ぁ♪　このままぁ……ん、私のおまんこで～♪　んぉ♪　おぉぉ……♪　このぉ♪　チンカス塗れで汚れたおちんぽ様を～♪　ぬぷぬぷマン汁で綺麗にしながら～♪　おまんこご奉仕♪　してさしあげますね♪」

夕恵。　「では、せ～のぉ♪」

夜恵。　「ん、せ～のぉ～」

夕恵　「ん、んほぉぉ♪　うぶぅ……♪　んおっ♪　お、お、お、お、お、お、お、おぉぉ……♪　あぁ♪　これがセックスぅ♪　ん、んふぅ～……♪　おぉぉ……♪　あぁ♪　やっとぉ♪　これが念願のおまんごせっぐしゅなのでしゅね～……♪」

夕恵　「ん、ぶふぅ～……♪　おぉぉ♪　あ、あぁ……♪　ダメぇ♪　ん、おぉぉ……♪　こんなぁ……ん、んふぅ♪　こんなに気持ちよくては、ん、おぉ～……♪　下品な声洩れて仕方ありません～……ぶほっ♪　お♪　お♪　お♪　おぉぉ～……♪」

夜恵　「ん、ちゅ……はぁ♪　御使い様のちんぽとお姉ちゃんのおまんこがぐちゅぐちゅ混ざって泡立ってる。これ、もしかしてチンカスがマン汁で洗い流されてるの？」

夜恵　「ん～……とっても臭い匂い……でも……ん、はぁ～～～～……ん、ごくっ……チンカスとお姉ちゃんのお汁が混ざったジュース……とっても美味しそう……」

夜恵　「御使い様。もっとチンカスジュース作って？お姉ちゃんのおまんこ使ってチンカスジュースいっぱい搾りだして？」

夕恵　「んん♪　お♪　おぉぉ……♪　ん、んふぅ♪あ、あぁ……♪　チンカスぅ♪　んん♪　チンカスとマン汁が溶け合ってぇ……♪　ん、おぉぉ……♪　おほぉぉ……♪♪　お♪　お♪　お♪　おぉぉ～～♪」

夕恵　「こんなぁ♪　私ぃ♪　ん、んほぉぉ♪　神様に仕えるぅ♪　立派な巫女さんなのにぃ～♪ぶ、ぶひぃぃ～～……♪　おぉお……♪　をほぉぉ……♪　んぶぅ～♪　あぁ♪　神聖なぁ～♪　ん、んぶぅ～……♪　巫女さんなのにぃ～……♪」

夕恵　「んぶぅ～……♪　おぉぉ♪　お、おぉぉ……♪　はぁ……ん、ひゅぅ……♪　ぅ、ぅぅ……♪　ん、んふぅ……♪　おぉぉ……♪　ん、おぉぉ……っふ♪　ん、ふぅ～～～……♪　ふぅぅ～～……♪　ん、おぉぉ……♪」

夕恵

「おぉぉ……♪　感じるぅ……♪　おぉぉ～～……♪　おぉ、おぉぉ……♪　おまんこ感じるぅ～♪　んふぅ～……♪　あぁ♪　おまんこぉ♪
　おまんこ止められないぃ……♪　ん、ん
おぉぉ……♪　あぁ♪　下品にぃ♪　ガニ股おまんこピスドン～～♪　止まらないぃ～……♪」

夕恵

「ぶぉぉ……♪　お、お、お、おおぉ……♪
ん、ぶおぉお……♪　ん、んふぅ……♪
おぉぉ……♪　お、おぉぉ……♪　んむぅ……♪　ぶおぉぉ～……♪　おぉぉ……♪　ん、んぶぅ～……！　ぶふぅっ……！　んおぉ……♪
　おぉぉ……♪　お、お、お、おぉぉ……♪」

夕恵

「み、御使い様ぁ……♪　んぶぅ♪　お、おぉぉ♪　ん、んふぅ～♪　キスぅ♪　御使い様とキスしたいれすしゅぅ……♪　ん、んふぅ～～……！　ふぅ、ふぅ、ふぅ、ふぅ、ふぅ、ふぅ、ふぅ……♪　んん♪　んおぉぉ……♪
ん、んおぉぉぉ……♪」

夕恵

「あぁ……♪　キスぅぅ～～～♪　ん、んぶぅ♪
　じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅ～～～……♪
　ん、んぶぅ♪　れりゅれりゅれりゅれりゅれりゅれりゅれりゅれりゅれりゅれりゅ～～～♪　んん♪
じゅるる♪　じゅるるるるぅぅ～～～～♪」

夕恵
「ん、んぶぉぉ～～～……♪　んおぉぉ～～♪
お、お、お、お、お、お、お、おぉぉぉ♪
ん、ふぅ～～……♪　おまんこしながらのキ
しゅぅぅ～～♪　ん、おぉぉ♪　あぁ♪　気持
ちいいですぅ～……♪　ん、ぅぶぅぅ……♪」

夕恵
「はぷっ♪　んん♪　じゅるる♪　じゅりゅりゅ
りゅりゅ～～～～♪　ん、んちゅ♪　じゅるる
♪　じゅぷっ♪　ん、んん♪　じゅるじゅる♪
　じゅりゅりゅりゅりゅ～～～～～～♪　ん、
ぷはぁ♪　ん、おぉぉ……♪　ん、お♪　お
ぼぉぉ……♪」

夕恵
「あぷっ♪　ん、じゅるる♪　じゅる♪　ん、ぶ
ぷぅっ♪　んじゅるるる♪　れろ♪　れろれ
ろぉ♪　んふぅ♪　舌ぁ♪　もっろらしてくら
ひゃいぃ～♪　ん、じゅるる♪　じゅりゅりゅ
りゅ～～～～～♪　ん、れろれろぉ～～～♪
ん、ぶふぅ♪」

夜恵
「ん、お姉ちゃん、もう理性無くして乱れまく
り。多分もうそろそろおまんこイクと思う」

夜恵
「御使い様もどう？　ちんぽ射精しそう？　ん、
そっか。ならいっぱい出してあげて？　今日は
夜恵達孕巫女を孕ませてもらう為にいるんだか
ら遠慮しなくていい」

夜恵
「金玉に溜めたおちんぽミルク、全部だぞ？　お姉ちゃんの下品なオナホまんこに吐き捨てて赤ちゃん産ませちゃお？」

夕恵
「ん、んおぉぉ♪　御使い様ぁ♪　ん、ぶほぉぉ……♪　おぉぉ♪　お、お、お、お、お、お、お、おぉぉ……♪　あぁ♪　また一段とおちんぽ様が膨らんで～……♪　ん、おごぉぉ……♪　ん、んふぅ♪　おぉぉ♪　あぁ♪　出そうなの分かりますぅ♪　おちんぽぉ♪　ちんぽちんぽちんぽちんぽぉぉ～～～……♪」

夕恵
「んふぅ～……♪　おぉぉ♪　いいですよ～♪　ん、んふぅ～……♪　このまま出してくださいぃ♪　ん、んぶぅ……♪　あぁ♪　私のおまんこにいっぱいぃ♪　ん、んほぉぉ♪　おごぉぉ……♪　子宮破けるくらいぃ♪　ん、んふぅ♪　いっふぁいらしてくらひゃいぃ……♪」

夕恵
「んぷぅ♪　じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅ～～～～♪　ん、んふぅ♪　いいれすからぁ♪　孕ませてくれていいれしゅからぁ～～♪　んちゅ♪　じゅる！　じゅるる♪　じゅぷぷぷっ♪　ん、じゅるじゅるじゅるじゅる♪　じゅりゅりゅりゅ～～～～♪」

夕恵

「ん、れろれろ♪　ん～、ちゅ♪　んぉ♪
おぉぉぉ……♪　どうかお嫁さんにぃ～……♪
　ん、んぶぅ♪　御使い様だけのおまんこにぃ
♪　孕み袋にしてくらひゃいぃぃ～～～……
♪」

夕恵

「んひぃ……！！　うぼぉぉ……♪　ん、おぉぉ
……♪　お、お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、おぉぉ……♪」

夕恵

「ん、あうぅぅ……♪　あぁイグ♪　イグイグイ
グイグイグイグイグぅ♪　ん、んおぉぉ…
……♪　御使い様のちんぽでイグぅ♪　おまんこ
イグ♪　雑魚まんごイぎゅぅ～♪　ん、おぉぉ
……♪　あぁ～～～♪　あ、あ、あ、あ、あぁぁ～
～……♪　ほんとにイグ♪　もうイギま
しゅぅぅ……！！」

夕恵

「ん、んぶぅぅ～～～～……！！　あうぅぅ…
……！！　あぁぁぁ～～～～～！！　あ、あ、
あ、あぁぁ……！！　イグゥ～～～！！　イグ
イグイグイグイグイグイグイグイグイグイグ
グイグイグイグイグイグイグイグイグイグイグ
イグイグイグイグイグイグイグイグイグイグイ
グぅぅ～～～～～……！！」

夕恵「イっっっっっぎゅうううぅぅぅぅぅぅ……！！？？」

夕恵「ぶほぉぉぉ～～～～……♪　ん、んおぉぉぉ……♪　あぐぅ……♪　ぅ……ぉ……おぉぉ……♪　あぁ～……出てりゅぅ～……♪　ん、んぶぅ……♪　おちんぽ汁ぅ……♪　孕ませみりゅくぅ～……♪　ん、んふぅ～……♪」

夕恵「あぁ～～……♪　あぁ～……ぶぴゅ、ってぇ～……♪　ん、んふぅ～……♪　おぉ……♪　ぁ……♪　気持ちいいれしゅ～……♪　おぉ……♪　ん、ぶふぅ……♪　ぉぉ……♪　ん、お、お、おぉ……♪」

夕恵ｒ「ん、んふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅぅぅ～～～～～……♪　ん、おぉ～……♪　んぉ……♪　お、おぉぉぉ……♪　はぁ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪」

夜恵ｒ「御使い様、おちんぽぴゅっぴゅ、お疲れ様。ん、ちゅ♪　おかげで御使い様のチンカスと精液のミックスジュースいっぱい出来た。これ、飲ませてもらうね？」

夜恵　「ぅ……お姉ちゃんのおまんこ臭すぎ……それに白く泡立ってムレムレ……すぅ～～……はぁぁ～～……ん、とっても臭くて美味しそう……じゃあ、いただきま～す」

夕恵　「ふぇ？　夜恵？　いつのまに……って……」

夕恵α　「んぎゅうぅぅぅうううぅぅぅぅ～～～～～……！！？？」

夜恵α　「じゅるるるるるるぅぅぅぅ～～～～～～～～……！！」

夕恵γ　「ちょっと夜恵っ！？　ん、んひぃぃ……！！おぉぉぉ……！！　ら、らめぇぇ～～～～……んひぃぃ～～～～～……！！？？　そこぉ～！　おまんこぉ♪　ぶ、ぶひぃぃ～～～～……！！？？　ん、おぉぉぉ～～～～……！！　無理ぃぃ～～……♪　おぉぉ♪　出りゅぅぅ～～♪　お漏らしでりゅぅ～～……♪　おぉぉ♪　おしっこ出りゅぅぅ～～～～……！！」

夜恵γ　「じゅる♪　じゅるるるるぅぅぅ～～～～～……♪　じゅぷぷ♪　ん、じゅる♪　じゅるるるぅぅぅ～～～～～……♪　じゅぷぷ♪　じゅる、じゅりゅりゅ♪　じゅりゅりゅりゅ～～～～♪」

夕恵s
「んっひいぃぃぃいいいいぃぃぃ……！！？？　おぼぉぉ～～……♪　ん、おぉぉ……♪　んあぁ～♪　夜恵ぇ～～……♪　おぉぉ♪　ダメぇ～～……♪　んふぅ～～……♪　吸わないで～……お姉ちゃんのおしっこぉ♪　おしっこ飲まないでぇ～……」

夜恵s
「ん、じゅる、じゅりゅりゅ～～……んん、お姉ちゃんのおひっこ……ん、じゅる、じゅりゅりゅりゅ～～～～♪　じゅる、じゅりゅりゅ♪　じゅるるる～～～……じゅる♪　ん、じゅりゅりゅりゅ～～～～……」

夕恵t
「ん、あぁ……止まんないぃ……んん♪　おしっこ止まらにゃいぃ～……♪　おぉぉ……♪　ん、おぉぉ……♪　ん、ふぅ～……♪　ふぅ～～……♪　ふぅ～～……♪　おぉぉ……♪　ん、お、おぉぉ～……んぉ♪　ん、おぉ～……あぁ……♪　お、おぉぉ……♪」

夜恵t
「ん、じゅる♪　じゅりゅりゅ……じゅるるるぅ～……♪　ん、ちゅ♪　れろ、れろれろれろれろ……じゅぷ♪　じゅるる……ん、ちゅ♪　れろ、れろれろ……れろれろれろれろ……ん、ん～……ちゅ♪　じゅる♪　じゅりゅりゅりゅ～～……」

夜恵

「ぷはぁ♪　はぁ、はぁ、はぁ……ん、くちゅ、くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ん～……ごく、ごく、ごく、ごく……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ～……ん、ご馳走様」

夕恵

「ん、はふぅ～……あぁ……んもぅ……夜恵ったらぁ……いきなりお姉ちゃんのおまんこに吸い付いて、イケナイ子なんだから～……」

夜恵

「ん、しょ……お姉ちゃんのおまんこから洩れるチンカスとか精液が美味しそうだったから我慢できなかった。それにサービスでお姉ちゃんのおしっこまで飲ませて貰えたしラッキー」

夕恵

「そ、そう？　ん、まぁ夜恵が私のおしっこ気に入ってくれたなら良かったけど……ん、はぁ～……♪　それにしても、あぁ～♪　御使い様ぁ♪　おまんこに入りきらない程沢山子種を注いでくださり、本当にありがとうございました♪」

夕恵

「今もお腹の中で御使い様の熱が感じられて……♪　ん、あぁ～♪　これがメスの喜び♪　孕ませていただく幸せなのですね♪　あぁ♪　御使い様のような素敵な方に孕ませていただけて私、感無量です♪」

夜恵　「ね、御使い様？　まだおちんぽミルク出せるよね？　ん、次は夜恵の番だから。お姉ちゃんと同じくらい激しく、お姉ちゃん以上にいっぱいぴゅっぴゅして欲しい」

夕恵　「ふふ♪　連戦になってしまい申し訳ありませんが、御使い様？　どうか夜恵の処女おまんこ孕ませてくださいませ♪」

夜恵　「ん、御使い様。夜恵の初めて、御使い様の為に大切にとっておいた処女おまんこ。いっぱい味わってね？」

トラック０５

夜恵　「御使い様。これ、お姉ちゃんのマン汁とおしっこでぐちゅぐちゅのちんぽ。夜恵のおまんこに入れるね？」

夕恵　「では私はこちらに失礼しまして……」

夕恵　「ん、ふぅぅ～～～～♪　ふふ♪　御使い様と夜恵のセックスを見守りながらお耳♪　ご奉仕してさしあげますね♪」

夜恵　「ん、御使い様。いくね？」

夜恵　「ん、あぅ……んん……はぁ、はぁ……凄い……お姉ちゃんと御使い様のミックスジュースがローションになって……ん、あん♪　ぁ……もう処女膜まで入ってきた……」

夜恵　「はぁ、はぁ……♪　ん、御使い様……いくね？　ちんぽで夜恵の処女膜、破っちゃうね？はぁ、はぁ……ん、んん……んくっ！　ぅ、うぅぅ……！！」

夜恵　「んふっ！　あ、んぁ、ぅ……ん、んぐぅぅっ！？　んぉ！　おぉ！　おぉぉぉおおおぉぉ……♪♪」

夜恵「

「んごぉぉ……♪　ん、んぶぅぅぅ～～……♪　おぉぉ……♪　ん、んふぅ～～～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅぅ～……♪　ん、んおぉぉ……♪　おぉ～……♪　お、おぉ～……♪」

夕恵「

「ふふ♪　あらあら♪　夜恵ったら下品な豚声上げちゃって♪　御使い様のおちんぽ、そんなに気に入ったんですね♪　あぁ♪　流石御使い様ですぅ♪　ちんぽの一刺しで孕巫女をメス豚に堕としちゃうなんて♪　ふふ♪　本当に素晴らしいですぅ♪」

夜恵

「はぁ、はぁ……み、御使い様……ん、大丈夫。夜恵は全然、んぶっ……おぉぉ……♪　ん、んふぅ～……♪　まだ、大丈夫、だから……ん、いっぱいちんぽゴシゴシして気持ちよくなって？　ん、ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅぅ～～～……♪」

夜恵

「ふぐぅっ！？　ぅ！　ひぅぅっ！？　んん！　おぉぉぉ……！！　んぉ……！　お、おぉぉぉ……！　あぁ、き、たぁ……っ！　ん、はひっ！　お、おぉぉ～……♪　んほぉ……♪　おぉぉ……♪　ぅ、うぶぅ……♪　ん、んふぅ～……♪」

夜恵
「おぉぉ……♪　ん、お、ぅぶぅっ……！　んほぉ……♪　おぉぉ……♪　お、お、お、お、お、お、お、お、おぉぉ……♪　ん、んふぅ～……♪　おぉぉ……♪　御使い様ぁ～……♪　ん、うぉぉ～～……♪　おぉぉ……♪　お、おぉぉ……♪」

夜恵
「げ、下品な声ぇ……♪　おぉぉ……♪　ぶ、ぶふぅ～……♪　ん、んっほぉぉおおぉ……♪　おぉぉ……♪　下品なごえでりゅぅ～……♪　んふぅ～……♪　おぉぉ♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お～……♪」

夕恵
「ふふ♪　夜恵も本格的にブタ声を上げ始めましたし、私も～……れ～～ろれろれろ～♪　ん～ちゅ♪　じゅるる♪　れりゅ♪　ん～ちゅ♪　ふふ♪　耳舐め♪　させていただきますね♪」

夜恵
「う、ぶふぅ～～～～……♪　ん、おぉぉ♪　あぁ♪　御使い様ぁ……♪　ん、んふぅ～～……♪　おぉぉ～……♪　ん、ぶおぉぉ……♪　おぉぉ♪　まんこぉ～……♪　んん♪　あぁ♪　そこはぁ……んん♪　おぉぉ……♪　子ぎゅうぅ……♪　お、おぉぉ……♪」

夜恵

「おぉぉ……♪　御使い様の子供を孕むぅ……♪
　んふぅ～……♪　大切な場所だからぁ～……
♪　ん、おぉぉ♪　お、お、お、おぉ～～～……
……♪　あぁ♪　乱暴にされちゃ……んぶぅ～……
……♪　おごぉ～～……♪　ごわれりゅぅ～～……
……♪　ん、んぶぅ～～～～……♪」

夜恵

「んごぉ～～……♪　駄目……ん、んふぅ～……
♪　ぶ、ぶぅ～～……♪　おぉぉ～～……♪
それ以上突かれたりゃ破れりゅぅぅ～～～～……
……♪　ん、んふぅ～～……♪　おぉ～……♪
ちんぽでぇ～♪　ちんぽでまんここわされ
りゅぅぅ～～～～……♪」

夜恵

「おぉぉ～～～……♪　ん、ふぅ～～♪　ふぅ、
ふぅ、ふぅ、ふぅ～～……♪　ん、おっ……
ふぅ～～～……♪　おぉぉ～～～……♪　あぁ
♪　御使いしゃま～……♪　ん、んふぅ～～……
……♪　おぉぉ♪　ん、お♪　お♪　お♪　お♪
　おぉぉ～～……♪」

夜恵

「んふぅ♪　ぶぴゅぶぴゅ出りゅぅ～～～……♪
　ん、んほぉ～～……♪　おぉぉ♪　まんほか
らぁ……♪　ん、んふぅ～……♪　あぁ♪　で
りゅぅ～～……♪　マン汁ぅ～……♪　ん、
おぉぉ～～……♪　おまんこ汁ぶっぴゅぶっ
ぴゅ出るの止まんにゃい～～……♪」

夜恵

「おぉぉ……♪　御使い様ぁ～……♪　ん、ふぅ～～……♪　ふぅ～～……ふぅ～～……♪　お、おぉぉ……♪　こんにゃの知らにゃいぃ～……♪　ん、ふぅ～～……♪　オナニーと比べ物にならないくらい気持ちいいのぉ～……♪　んんっ！　おっ……ほぉぉおおぉぉ～～～～……！！？？」

夜恵

「ん、おぉぉ…………♪　んぉ…………♪　おぉぉ……♪　はひぃっ！？　ぶふっ！　おぉ～……♪　ん、お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪
おぉ～～♪」

夕恵

「ふふ♪　御使い様ぁ♪　ん～ちゅ♪　最初からそのペースですと、おちんぽぴゅっぴゅする前に夜恵がイキ死んでしまいますよ？　ふふ♪　ん、ちゅ♪　れろ、れろれろれろれろれろ♪」

夕恵

「ん？　あらあら♪　確かに私も、普段大人しい夜恵がイキ狂う姿は見たくはありますけど……ふふ♪　はい、分かりました♪　私も夜恵をイキ狂わせるお手伝いをさせていただきますね♪」

夜恵

「ん、おぉぉ……♪　ん、ぶ、ぶひぃ～………♪　おぉぉ～～……ん、は、はひぃ？　お、お姉ちゃん？　ん、おぉぉ……何して……ってっ……んぎいぃぃぃぃいいぃぃ……！！？？」

夜恵

「はっひいぃぃぃいいぃぃ……！！？？　おぉぉ～～……ん、んほぉぉ～～～……♪　お、お姉ちゃん～……！　ら、らめ……！　そこ、クリぃ～……、ん、ぶふぅ～～……♪　おぉぉ……♪　勃起ぃ♪　クリぃ……♪　クリトリスぅ～……♪　おぉぉ……♪」

夜恵

「んん！　んひぃっ……！？　お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、おぉぉ……♪　クリ駄目クリ駄目クリ駄目クリ駄目ぇ～～～……！！　ん、んおぉぉ……♪　クリぃ♪　んぶぅ♪　クリクリクリクリクリクリクリクリぃぃ～～……♪　んおぉぉ～～……♪　無理無理無理無理無理無理無理無理ぃ～～……！！」

夜恵

「ん、おぉぉ～～……！！　それイグぅ～……！　クリいぎゅうぅ……！　お姉ちゃん止めて！　ちんぽとクリでイぎゅうぅぅ……！！　クリイギュ！　まんこイギュぅぅうううぅぅ……！！」

夜恵u
「ぶおぉぉ～～～～～……！！　お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、おぉぉ……♪　ん、ぶひぃ～～……♪おぉぉ……♪　あぁ～～……！！　グリぃぃ～～……！！　クリいきゅぅぅ～～～……！！クリトリス取れりゅぅ～～～……♪　んほぉぉ～～～……♪　お、お、お、お、お、お、お、おぉぉ……♪　ん、んふぅ～……♪おぉぉ……♪　お、お、お、おぉぉ……♪」

夕恵u
「ん、夜恵？　そのままイって？　御使い様もそれがお望みだから♪　ほら♪　クリもっと強く潰してあげるから♪　えい♪　えいえい♪」

夜恵
「おぉぉ～～～～♪　あぁ～～……！！　も、もう無理ぃ～～……！！　んぉぉ～～……♪あぁイグ！　イグイグイグイグイグイグイグイグイグイグイグイグイグイグイグイグイグぅ～～……！　イっぐぅぅううううぅぅぅ……！！！！」

夜恵
「おっほぉぉおおおぉぉおぉ…………♪♪ん、おぉぉ～～……♪　ぶぴゅっ……♪　ん、おぉぉ～～……♪　ん、ふぅぅ～～～……♪ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪ふぅぅ～～～……♪」

夜恵

「お、おぼぉぉ～～……………♪　あぁぁ～～～～……………♪　ひ、ひぃぃ～～…………♪　ん、んふぅ～～……♪　おぉぉ～～……♪　あぁ～……♪　まんこぉ～……♪　まんこ緩むぅ～……♪　漏らすぅ～……♪　まん汁ぅ～……♪ぅ、お、おぉ～～……♪」

夜恵v

「はぁ、はぁ～……んひぃ～……！　ぅっ、おぉぉ～～……♪　ん、んぶぅ～……♪おぉぉ～～……♪　ん、お、おぉ～……♪はぁ、はひぃ～……♪　ぅっ、はぁ、ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅぅ～～～～……♪」

夕恵v

「あらあら～♪　ふふ♪　こんなにおしっこ漏らしたりしてぇ♪　夜恵のくっさいおしっこ臭で部屋が満たされちゃってますね～♪　はぁ～～～♪　くっさ～～～い♪　わが妹ながら、世界一臭いおしっこです～♪」

夜恵w

「んん……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪ふぅ～……♪　ふぅぅ～～～……♪　ん、んっほ……♪　お、おぉ～………♪　ん、ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪ふぅ～……♪　すぅ～～……はぁぁ～～～………♪　ん、おぉぉ～……♪」

夕恵〜

「で〜も〜♪　御使い様より先にイっちゃうなんて、孕巫女としては不合格ですからぁ♪　ふふ♪　御使い様？　どうか、またおちんぽでイキたてほやほやのお漏らしおまんこ♪　可愛がってあげてください♪」

夜恵

「ん、はぁ、はぁ〜……ん、ふぇ？　お、お姉ちゃん？　待って……イったばかりで今はまだちょっと休ませ……」

夜恵

「んぶぅっっっ！！？？　ぶふっ！　ぅおえっ！　ぅっ！　おぼえぇぇえええええぇぇぇえ　えぇぇ……！！！！」

夜恵

「うっ、うぶっ！　おえぇぇえええぇぇ……！！　お、おぉぉ……！！　おっ！　おぉ〜〜……！！　み、御使い、ん、うぶぅっ……！　おえぇぇえええぇぇぇ〜〜……！！」

夜恵

「んん……！！　お、おぉぉ……！！　んおぉ〜……！！　おぉぉ……！！　ん、んぶぅ〜……！　おぉぉ〜……！！　んおぉ♪　おっ！　おっ！　おっ！　おっ！　おっ！　おっ！　おっ！　おぉ〜……！！」

夜恵
「ん、んふぅ～……！！　おぉぉ～～……！！
ぢんぽぉ～……！！　おぉぉ……♪　ん、おぉ～……♪　んふぅ～……♪　ふぅ～……！
ふぅぅ～～……！　ぉぉ～……♪　ぢんぽ無理ぃ～……♪　じぬ～……♪　んふぅ～……♪
ぢんぽでイキじぬぅ～……♪」

夕恵
「ふふ♪　あぁ♪　イったばかりのおまんこをおちんぽでかき回される音ぉ♪　はぁ～♪　聞いているだけでうっとりしてしまいますね～♪」

夕恵
「あぁ♪　御使い様ぁ♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪　どうか射精される最後まで♪　夜恵の事可愛がってあげてくださいね？　ん～……ちゅ♪」

夜恵
「うぶぅ……！　ん、んん～……♪　あぁ……！
ぉ、おぉぉ……♪　おっふ……♪　ぅぅ……♪　おぉぉ～……♪　あぁ……無理ぃ～……ん、んふぅ～……も、もうイグぅ……！
ぅぅ……ぁぁ～……おぉぉ……♪」

夜恵
「イっだばかりなのにぃ～……ん、んふぅ～……！　おぉぉ～……！！　お、おぉぉ……♪　んおぉぉぉ～～……♪♪　おぉぉ～……♪♪　まんごまだいぐぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅぅ～～……♪　ん、んおぉ～……♪」

夜恵

「はぁ、はぁ……ん、おぉぉ……♪　御づがいざま～……♪　ん、んぶぅ～……♪　おぉぉ……♪　お、おぉぉ～……♪　きしゅぅ～……♪　ぎじゅぅ～……♪♪　ん、んぷぅっ！」

夜恵

「んん♪　じゅるる♪　じゅるるるぅぅ～～……♪　じゅるる♪　ん、んぷぅ♪　ん～♪　じゅぷっ♪　れろ♪　れりゅれりゅれりゅれりゅ♪　じゅる♪　じゅぷぷ♪　ん、じゅるるるぅ～～……♪」

夜恵

「ん、ぶふぅ～……♪　おぉぉ♪　きしゅしゅご」いぃ～……♪　ん、はぷっ♪　じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅ～～……♪　んぶぅ♪　ぶぷっ！　じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅ～～♪　ん、ちゅ♪　れ～ろれろれろ～♪　じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅ♪」

夜恵

「ん、ぶもぉぉ～～……♪　おぉぉ～～♪　御づがい様ぁ～♪　じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅ～～♪　んふぅ～……♪　ぶひぃ～！　おぉぉ～～♪　んおぉぉ～～～♪　い、イギますぅ～……♪　おぉぉ～～♪　おぉぉ～～～♪　もうぅ～～……♪　おぉぉ～～～～……♪　もうイギますぅ～～……♪　まんごぉ～……♪　まんこイギますぅぅ～～～……！！！」

夕恵

「ふふ♪　御使い様も夜恵ももう限界みたいですね♪　なら私がカウントでタイミングをとりますので2人共合わせていただく形で絶頂してくださいね♪」

夕恵

「ふふ♪　ではラストスパートに致しましょう♪」

夜恵x

「ん、お、おぉぉ～～～～……！！　ぶ、ぶひぃ～～～……！！　ん、んおぉぉ～～～……！！　ちんぽ激じぃぃ～～……♪　ん、んおぉぉ～～……♪　んあぁぁ～～～……♪　おぉぉ～～～♪　ん、お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　おぉぉ～～……♪」

夜恵x

「んぼぉぉ～～～♪　おぉぉ～～♪　無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理ぃぃ～～～……♪　おぉぉ～～～♪　いぐぅ～～～♪　イグイグイグイグイグイグイグイグイグイグイグイグイグイグイグイグぅぅ～～……！！　ん、んふぅぅ～～～……！！　おぉぉ～～～……！！　んひぃ～～～……♪　イっぎゅううぅぅぅぅぅうううぅぅぅ～～～～……！！！！」

夕恵x

「10♪　9♪　8♪　7♪　6♪ 5♪　4♪　3♪　2♪　1♪」

夜恵y「んっひいいいいいいいいいい～～～～～……♪♪♪♪」

夕恵y「ゼロ～～～～～♪」

夜恵「んおぉぉ～～～……♪　んほぉ♪　お、おぉぉ～～～～……♪　あぐぁ～～～～……♪ん、おぉぉ～～～～……♪　で、でりゅぅ～～……♪　ん、んぶぅ～……♪　おぉぉ～～～……♪　まんごぉ～……♪　んぶぅ～……♪おぉぉ～……♪　みりゅぐぅ～……♪　おちんぽみりゅぐれてりゅのぉ～……♪　ん、おぉぉ～……♪」

夜恵「ん、んん～～……♪　おぉぉ～～……♪　ん、んふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ～……♪　ふぅ……♪　ふぅ～……♪　ん、んふぅ～～……♪　おぉぉ～……♪　あぁ♪　御使い様ぁ～……♪　ん、おぉぉ～……♪　しゅきぃ～……♪　ん、ぶおぉ～……♪　しゅきぃ～……♪」

夜恵「ん、ちゅ♪　れろ、れろれろ……んちゅ……ちゅ、ん～……ちゅ♪　は～……む♪　ん～、ちゅ♪　れろ、れろれろ……♪　はぷっ、ちゅ♪　ん……ちゅ♪　はぁ、はぁ……んぁ……♪んん……♪　はぁぁ～～～……♪」

夕恵「ふふ♪　御使い様、お疲れ様でした♪　私と夜恵の2人に連続でお射精していただき、本当にありがとうございます♪」

夜恵「ん、はぁ、はぁ～……♪　ん、御使い様、ありがとう。あんなに乱れたのは初めてで……新しいメスの快楽、いっぱい教えてもらった。嬉しい。大好き。ん～……ちゅ♪」

夕恵「私も御使い様の事大好きですよ？　ん～……ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

夜恵「ん、はぁ、はぁ……あうぅ……ん、もう駄目……疲れすぎて、うにゅぅ～……眠気が……う、うぅ……」

夕恵「あらあら夜恵ったら♪　って、御使い様ももう眠たくなっちゃいましたか？」

夕恵「ふふ♪　では、このまま3人川の字になって寝てしまいましょうか♪　はい、一緒に添い寝致しましょう♪」

夜恵「ん、お姉ちゃん、それ名案……このままお姉ちゃんと御使い様と一緒……ん、んみゅぅ……抱き合いながら寝るぅ～……ん、みゃうぅ……」

夕恵「私も♪　ぎゅうぅぅ～～～……♪　ん、はぁ～……♪　あぁ♪　御使い様ぁ♪」

夜恵　「御使い様ぁ……♪」

夕恵　「本日は私達孕巫女の処女を貫いてくださり誠にありがとうございます～♪」

夜恵　「これからも、いっぱいおまんこシテね？」

夕恵Ｚ　「愛しております♪　御使い様♪」

夜恵Ｚ　「愛してる……御使い様ぁ……♪」

トラック０６

夕恵　「まぁ♪　御使い様ったら♪　ふふ♪　昨夜はあんなに射精されたのに、一晩寝ただけでもうこんなに勃起されて♪」

夜恵　「眠っててもこんなに立派なんて、流石夜恵達の御使い様。ん、すん、スンスン……はふぅ～……チンカスの蒸れて臭い香りも鼻にくる……ん、あうぅ～……とっても臭くて美味しそう……♪」

夕恵　「ふふ♪　夜恵？　一緒にお目覚めのお掃除フェラをしてあげましょうか♪」

夜恵　「ん、賛成。夜恵とお姉ちゃんのおロマンコで、御使い様に最高の目覚めを提供してあげる」

夕恵　「それじゃあせ～のでね？」

夜恵　「ん、分かった」

夕恵A　「せ～の♪　あ～……む♪」

夜恵A　「せ～の……あ～……む！」

夕恵　「あぁ♪　これぇ♪　昨日私達を犯した際のお汁が残ってて……♪　んん♪　しゃぶってもしゃぶっても中々汚れが落ちませんね～……♪」

夜恵「ん、チンカスも包茎の中に溜まってる……ん、もっろ～……舌をチン皮の中に差し込んで～……じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅ～～……♪　ん、じゅぶぶ♪　ん～……ちゅ♪　れ～ろれろれろぉ♪」

夕恵「んふ♪　わたひも～♪　御使い様のチンカスぅ♪　いただきま～す♪　れ～ろれろれろれろ～……♪　ん、じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅ～～～……♪　んん♪　じゅる♪　じゅるるぅ～～……♪」

夜恵「もっろぉ～……♪　ん、もっろお口の奥まれ入れ～……♪　ん、はぷぅっ♪」

夕恵「あらあら♪　夜恵ったらおちんぽ様そんなに奥まで咥えちゃって♪　ん、なら～……♪　私は精子の詰まった金玉に～……れ～ろれろれろ♪　ん～……ちゅ♪　ご奉仕しますね～♪」

夜恵「んぶっ、ん、じゅるる、じゅりゅりゅりゅりゅ～～～～……♪　ん、じゅるる、じゅるっ♪　ん、じゅるるぅ～～……ん、ぷはぁ♪　はぁ、はぁ、はぁ、はぁ～……♪」

夜恵「ん、えうぅ……♪　あぁ♪　お口の中にチンカスがいっぱい……♪　ん……ちゅ♪　えへへ……朝から御使い様のチンカス飯食べれて幸せ……♪」

夕恵

「ん、夜恵ばっかりズルイですぅ……私もぉ～……お口の奥まれ～……♪　あ～～～……んむぅ♪　じゅる♪　じゅりゅりゅりゅ～～～～……♪　ん、じゅるる♪　じゅぷっ♪　ん、じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶじゅぶじゅぶじゅぶじゅぶじゅぶ♪　んん♪　じゅるるるるぅ～～……♪」

夕恵

「んん！　じゅるる！　じゅりゅりゅりゅ～～……♪　ん、んぶぅ～♪　カリ裏にチンカス残ってて……♪　ん、じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅ～～……♪　ん、んぶぅ♪　美味しいチンカスぅ♪　全部食べちゃいまふ～♪」

夜恵

「ん、御使い様の金玉……チン毛がいっぱい生えてて……あむ、ん、ちゅ♪　れろ、れろれろれろれろ……んん、少し、えぅ……舐めにくい……ん、ちゅ♪　れろ、れろれろ……」

夕恵

「ん、じゅぶぶっ！　じゅる、ん、んん～……じゅりゅりゅりゅりゅ～～～♪　ん、じゅぶぶっ！　じゅぶ♪　ん、じゅるる……ん、ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……♪　ん、ふふふ♪　ん、れ～～……♪　んむぅ♪　くっさいチンカスいっぱい取れまひた～♪」

夕恵

「んふふ♪　あぁ♪　一晩蒸らされた臭くて黄ばんだチンカスぅ……♪　んん♪　あぁ♪　ごっくんするのが楽しみですぅ～……♪」

夜恵　「んみゅ……お姉ちゃん……一緒に……御使い様の耳元で……」

夕恵　「ん♪　夜恵と一緒にぃ……」

夜恵B　「んむ……くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ん～……ごく、ごく、ごく、ごく、ごく……んむぅ……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ、はぁ～～……♪　ん、ぅっ♪　おえぇぇぇぇぇぇぇぇ……♪♪」

夕恵B　「んむ……くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ん～……ごく、ごく、ごく、ごく……んむぅ……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ、はぁ～～……♪　ん、ぅっ♪　おえぇぇぇぇぇぇぇぇ……♪♪」

夕恵　「うえぇ……♪　けほっ、けほっ……♪　ふふ♪　あぁ♪　流石御使い様のチンカスです♪　吐きそうな程臭いのにこの美味しさ♪　あぁ♪　堪りません～♪」

夜恵　「ん、とっても美味しい朝ごはんだった。御使い様。ご馳走様……って、あれ？　御使い様、ここまでされてまだ起きてない。とっても寝坊助さん。えへ……可愛い……♪」

夕恵　「ふふ♪　それだけ昨夜は頑張ってくれたという事なのでしょう♪　ですが、これ以上は私達のおまんこが我慢できませんので、心苦しいですがここは起こしてあげましょうか♪」

夕恵C　「ん、ふぅぅ～～～～～～～♪」

夜恵C　「ん、ふぅぅ～～～～～～～♪」

夕恵　「は～い♪　御使い様ぁ？　朝ですよ～♪」

夜恵　「早く起きて？　もう夜恵達、エッチしたくてしたくて堪らないから」

夕恵　「はい♪　朝から御使い様のチンカスを食べておまんこがうずうずしちゃってますので♪」

夜恵　「今日は一日ずぅ～～っと御使い様とエッチする」

夕恵　「寝起きにエッチは勿論の事、お食事中もお風呂の際も♪　いつでもどこでも孕ませエッチしていただく予定です♪」

夜恵　「夜恵達が孕むまで毎日同じようにエッチしてもらうから……」

夕恵　「御使い様がお望みでしたら孕ませた後も♪　出産した後でも♪　いつでもいつまでもエッチしてくださって構いませんから♪」

夕恵　「どうかいつまでも私達を愛してくださいね？」

夜恵　「夜恵達も愛してる……御使い様♪」